

Logo: Nori

ちきゅう

ジュピタリアンヒル (鳥取県大山)

の要

<https://jupitarianhill.daiverse.com/>

木星人の「こえ」が聴こえますか？ (蛹)

●そこに入るとみな重心を呼び起こされるといふふしげな場所、それがジュピタリアンヒル。木星人の秘密基地です。

●山ノ内さんの木工作品等を展示するスペースこそあれ、ジュピタリアンヒルはなんと言葉で表したらいいのか説明しにくいスペースで、聖地と言いますとも多いようです。言わずにはどうやら、山ノ内さんのこれま

での創作が膨らみ、拡がりつづけた「すばらしいなれの果て」であるようなのです。数えきれない創作たちがそれぞれ呼吸していました。なおかつそれらが有機的にひと連なりにつながり、ジュピタリアンヒルというひとつのいのちとして生きていること、それに心を奪われました。あまりにも有機的過ぎて、宇宙にとても近い場所、という印象も受けました。わたしには、どこかじかじから、「ツクシツクシ、アンペアンペ」という「こえ」が聞こえてきたくて聴こえてきてそれに驚きました。いのちが励まされ心が踊りました。ジュピタリアンヒルの地べたが、風が、その大音声が叫び続けているようなのです。同時にその叫び声は、ともすればタマシイを石棺に閉じ込めたままでも生きていることを選ぼうとしていたもうひとりのわたしにとっては、とても深刻なエマーシエンシーにも聴こえていました。

そのくわいで、深くついに届く「こえ」が響いてきたのです。(後口、取材に同席していた縄文土器作家の小野真由美さんと「ジュピタリアンヒルを訪れることができてうれしかったよ」と伝えると彼女は「ジュピも言っているよ」と言っていました。そんな言い方をするのはやはり「ジュピタリアンヒルが生きて呼吸しているから、なのです。)

●帰途に就くまえ、駐車場までわたしたちびたりを大八車に乗せて送り届けてくれた山ノ内さん。大八車を軽々と引く山ノ内さんの力強い足取り。わたしは割り続けるひとのその背中に見入ってしまいました。その背中也メッセージでした。

●山ノ内さんは自身のことを木星人の使いなのだと言います。そして廃墟だったこの丘を「人類以前に存在し、この地球の生命環境を維持してきた樹木」との共存・共生していく実践の場として、木とこつ向き合うのかをテーマに創作し、生活しています。その答えがツリーハウスや木工作品のなかにあります。木星人の思召のままに創作を繰り広げる山ノ内さんのからだは「木星人との契約期間中、ジュピタリアンヒルをこつまで建設し、世界中に作品をあらわし、木星人のメッセージを届け続けるのだそうです。それらはこれからますます、縁あるひとたちの童心を励まし、不思議な力を与え続け、この星のほんとうの豊かさを思い出させてくれるはずですよ。



↑「空舟」デッキの上でくつろぐ山ノ内さん

たちが出向かえてくれる。そしてやはり不要とされた木々の塊から掘り出された椅子やオブジェの他、家具用の空の綺麗な板やテーブルも並んでいる。色んな樹種が交じり合ったその室内の芳香に魅せら



れる人も多いという。

3年前外注で造ったツリーハウスも人気の山ノ内さん。南側の伐り残された2本のシイノキの上には3角形のデッキが2段乗せられ、大山と海を望むことができる。樹上6mを通る風と光はココロに溜まったオリを流してくれるのか、いいオトナが下りてこなくならない。(ひそかに樹上生活していた頃を懐かしんでいるかも知れない) このデッキは3F、4Fと計画しているのでさらなる展望が楽しみである。

「15年を経て草木のろくに生えない荒涼とした廃墟の丘が、クワやケヤキ、コナラ、クリ等の己生えの樹々や屋根材として使うススキ、カルカヤ等の草々や様々な野生のイチゴも自生する緑なす丘へと年々変貌していく有り様を、喜ぶと共に自然の底チカラを知らされる。自分がここに居なければアツという間に呑み込まれるだろう。」と木々との共生をテーマにしている山ノ内さんは語っている。



←二段デッキのある「空舟」。上からは大山と海が見えた。



霊峰大山の麓、日本海をのぞむ丘に「ジュピタリアンヒル」(木星人の丘)がある。

15年前ここに木工房を開いた山ノ内彦彦さんは、隣町の出身。20代から

歩いたという彼に似つかわしい場所で、ここに呼ばれたのではと思うこともあったという。この仕事を始めた当初からいつか大きな木と向き合いたいと思いつけていた彼にとってこの広大な丘は、格好の場所であり、不要とされた大木や変木を活かすべく、作品のみならず、近くから集められた枝や葉、竹、草やツルなどを使って工房内いくつもの小屋が造られている。それらはその丸味を帯びた形から建物と呼ぶより大地から生えている何かイキモノのにも見える。その幾つかの小屋の中には薪を燃やす囲炉裏があり来客をもてなそうだが、その燃えている炎を見つめながら、時を忘れ自己を取り戻す人もあるときく。昨年秋から縄文土器を使った煮炊きを始めて、年々増えてきた野の食材を使う機会も多くなり、復活しつつある環境を実感している。

中心に建てられた高さ5mを超える竹のドームは、普段は作品の展示スペースだが、イベントやライブの会場としても使われるという。土壁、菅壁、茅葺、和紙のドアで構成されるそのドーム空間の中央部分は天頂に空いた天窗と垂直に気が通るスポットとして人気で、自分をリセットすることが出来るようだ。

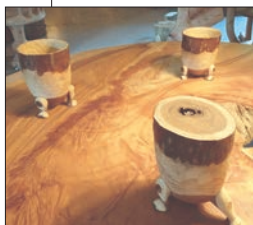
向かいの「ギャラリー安樹」には入口に「木靴」が並び、和紙のほのかな灯りの中、木星人



30代初めまで東京で過ごしたのち帰郷して、ふと近くの山で出会った樹の枝を持ち帰ったことがきっかけで小さな家具を作り始めた。以後大なるエネルギーに吸い寄せられるように木の世界にのめり込んでゆく。木の仕事に携わる事を決意した後、独学で注文家具や灯りを作りながら、伐られた木の中に何か生きものの気配を感じ続けていた彼が10年後見つけたのが短足、ガニ又、三本足の「木星人」だ。彼等はヒトに放棄された木の中にいて、山ノ内さんの手で彫り出され「ワレハココニイル」ことをアピールしているかのようだ。彼曰く「木星人は今このタイミングでこの星に現れたメッセンジャーで・・・」(この続きはジュピタリアンヒルブログ内『木星人のはなし』で) →

「源流系工場」と銘うった工房は、見つけた当初は前の工事会社の社屋が点在する廃墟だった。そこには様々なゴミが運び込まれていて地元ではゴミ捨て場になる事を心配していた。そこは20代後半からカメラを手に国内外の廃墟を探しながら撮り

←三本脚がかわいい木星人たち



↑様々な形・大きさの茅葺き小屋があちこちに建っている。

↑木星ドームには椅子や机や不思議なものがいっぱいで扉は和紙。